

Y5-13

院内出生児2例から *Ralstonia pickettii* 分離された事案への当院ICTの介入

横浜市立みなと赤十字病院 ICT

○右崎 眞珠美、磯崎 淳、酒井 雄一郎、
君 めぐみ、武藤 久美子、三上 久美子、
伊藤 好行、相曾 啓史、菅江 貞亨、
佐藤 守彦、萩山 裕之

院内感染防止のため、細菌の分離状況を掌握することは重要である。院内感染を起こしうる特殊な細菌である *Ralstonia pickettii* が、ほぼ同時期に異なる院内出生の新生児2例の髄液から検出されたことをうけて、当院ICTが介入した事例について報告する。症例1：平成20年12月18日に当院にて出生、退院後の平成21年1月3日（日齢14）に発熱を主訴に入院、髄液から *R. pickettii* が分離・同定された。症例2：平成21年2月5日に当院にて出生、入院中の年2月7日（日齢2）に発熱し、同日の深夜にNICUに入院、髄液から *R. pickettii* が分離・同定された。これを受け当院ICTでは、両児ともに院内出生児であることから院内感染の可能性を考慮し、分娩室ならびに新生児室の環境培養を行うとともに、両者から分離された検体を衛生研究所に依頼し相同性の確認を行った。環境培養からは同菌は検出されず、2例の検体から分離された細菌の相同性は異なる結果を得ており、院内感染は否定的と考えられた。本事案では院内感染は否定的と考えられたが、日常より院内の細菌の分離状況を掌握することで早期の介入が可能となり、院内感染を早期に発見、対策を講ずることができるものと思われた。

Y5-14

特定抗生物質の申請制が使用量に及ぼす影響

芳賀赤十字病院 ICT

○関澤 真人、野澤 寿美子、金澤 靖子、
黒川 敬男、佐藤 寛丈、近藤 義政

【はじめに】当院では特定抗生物質（注射薬）に関して、適正使用の目的で2007年4月に申請制を導入した（入院患者）。その結果、使用量に変化が見られたので報告する。特定抗生剤とは、抗MRSA薬、ニューキノロン薬、カルバペネム薬、とする。

【方法】1) 2006年4月～2009年3月までの特定抗生剤（今回はカルバペネム薬）の使用本数、人数の調査 2) 総入院患者におけるカルバペネム薬の使用割合 3) 使用日数調査

【結果】申請制以降カルバペネム薬の使用量、使用人数は確実に減ってきている。